

第十七回 ああ名前

堀内 守

「名前」というものはふしぎなものである。

なくては困る。しかし単なる符号でもないことはたしかだ。

命名という行為は、でき合いのレッテルを選びとるようなものではない。いろいろな材料を集め、古今東西の文献を頭の中で整理し、識者（このうちには先輩だの、年寄りだの、いろいろな人が入る）の意見を徴し、さて、その上で選考が行われる。音、字画、字形、意味、その他がしだいに固まっていく。しかし、この経過は、

落語の「寿限無」とは反対である。よい名を全部つけるわけにはいかないからである。

祈り、期待、見栄、テレ等が織りなすこの命名は、名づけられる子の側とは別のところで取り行われる。秘儀、秘蹟、呪術的な匂いもする。

ところが、そんなにしてつけてもらった名前はご当人の気に入るかどうか。それはまことに微妙である。

もちろん、当初はそんなことはわからない。自己意識が生まれるまでは名前もつばら受け身的な形で使われている。その文脈は、場面によって驚くほど変わる。

たとえば「太郎」や「花子」——というのが代表的なナマエのように思われてきたが、統計的には、この名前は少ない——が、他人からその名を呼ばれる場面では何が起こるのか。「太郎や」、「花子よ」というような短いセリフでも何十通りもの演技で上演が可能である。

「太郎や（いい子だね）」「太郎や（いけません）」「太郎や（早くやりなさい）」「太郎や（たのむよ）」等々、何通りにもなる。おまけに、このうちの「太郎や（いけま

せん)一つとってみても、太郎と相手の人間関係(間柄)によって何通りにも変わる。

こんなに複雑なドラマをよくもまあまぢがえないでやれるものだ。しかし、また、よくまぢがえて叱られたり、恥をかいたりするものだ。と、双方を含めてふしぎに思うのがよいようである。

このようなことを繰り返していくなかで、無限のニュアンスを感じとる力もできていくのである。そして、「あ、いまあの人はやさしい声で『太郎ちゃん』などと呼びかけてくれたが、あれは別のだれかがいるから、その人の眼を意識して、無理な演技をしているのだな」などと感じとっていく。それと裏腹な現象が、「太郎」という名前が自分と一体化し、骨肉化していくということなのである。

骨肉化とは

この「骨肉化」という現象はもつとふしぎである。

「一体化」も「アイデンティティー」という心理学・精神

分析学・社会学・教育学の礎石の一つのように見なされているが、「骨肉化」の方は「血肉化」とも表現され、「インカーネーション」という宗教用語に由来する。比喩的に「血や肉になる」と理解されているのはご存知のとおり。

しかし、名前がどうして自分のものになるのか。これを「我有化」などというドキッとするようなタームで表現し、説明したつもりになっている分野もあるから注意を要する。要するに、比喩としてしか表現できず、またどうしてそんなことが生まれるのかメカニズムがわからないのである。わからないけれども、大変大事なことなのである。

早い話、あなたが同姓同名の人に出会った時の変な気分についていねいに分析してごらんになるとよい。大人であるがゆえに、この気恥かしさは増幅もされ、また逆に抑制もされるのが本当のところだろう。

子どもの場合にはもつと開けっ広げになる。この場合は姓よりも名の方がモンダイになる。「太郎」が別の「太

郎」に出会う。「花子」が別の「花子」に出会う。別の
人なのに、なぜ自分と同じ名をもっているのか。(差異
と同一。これだけでも大変なテーマになる。現にその題
のもと、大部の本を書きあげた人もいる)。いや、その
前に、相手も自分と同じ名前だと知った際の、親近感と
嫌悪感の入り混った、身の置きどころなき気分はどうだ
ろう。

「あちら」の人が「こちら」とどこか重なっているよう
で、またどこか離れているようで、〈自分〉と〈あの入
〉という輪郭も融けて、主人公は〈場〉に代わる。だか
ら、その〈場〉にいたたまれなくなる。

「骨肉化」ないし「血肉化」とは、こんな面から少しず
つ明らかにされていく。

名前は符号じゃない。レットルでもない。何となく自
分そのもののように思えるようになる。それには、他者
との出会いを重ねていかなければならない。つらい、楽
しい、いやな、面白い、悲しい、うれしい、惹かれ、反
発する……というような相矛盾した中で。

我有化

「ガニールカ」ひどい訓み方。でも「わがものとする」な
どという表現も、いかにも間のびしている。認識論の上
では大変大事な概念なのでありまゝす。でも、認識ロン
者の口にかかると、チンプンカンプンになってしまうの
で、ここでそうならぬよう、ある場面を取りあげ、その
機微を味わっていただくことにしよう。

太郎がたくさんの玩具をもっていたとする。そのうち
のいくつかはもう飽きてしまつて、だれかにあげようと
納得していたとする。そこへ花子が遊びに来た。太郎は
気前よく花子にその玩具のいくつかを与える。

花子のもらった玩具で遊びはじめ、それに夢中になり
はじめ。

それを見ていた太郎は急に、花子からやったはずの玩
具を取りあげてしまう。

よくあることなのだ。あまりにもありふれているか
ら、この意味は軽く扱われてしまうのだが、ここに「血

肉化」や「我有化」の正体が見えている。

太郎はその玩具に飽きていたはずだった。それなのに、花子がそれで楽しく遊ぶのを見て、新しく遊びの意味を見つけ直したのである。というように、カッコよく言うよりも、この底には嫉妬が生まれていると言う方がピンとくる。この嫉妬が生まれるには「花子」という他者がいて、遊びを見せてくれることが必要である。太郎はそれを見て、「自分にもあのように楽しく遊べる可能性がある」ということを再発見し、その「可能性」を花子に渡してしまったという反省をするうち、自分で自分をどうしていいかわからなくなったのである。

自分で自分をどうしていいかわからない。

このことは〈自分〉が二つに分かれていることを示す。〈見ている自分〉と〈見られている自分〉。この二つがうまくバランスを保つ——そんなことはめったにないが——と、一応〈自分〉は意識の表面から退いている。つまり、あえて〈自分〉を意識せずとも、フツーに「自分で自分をどうしていいか」処理しているのである。

これはフツーの常識とは反対の考え方である。常識では、〈見ている自分〉と〈見られている自分〉とがうまくバランスを保つのが理想とされ、それが推賞され、何となくそれが容易であるかのように思われているのだから。

名の文法

では「名」にまつわる密林の探検に出かけよう。

この国では素朴な実在論が支配的だ。だから「名は体を表わす」というような諺がはびこっている。あまりよい名前をつけたがすでに「名前負け」をしたなどともいうが、これも「名は体を表わす」をひっくりかえした考え方にもとづいている。

古くは言霊思想という呪術にもとづいている。「名乗る」ということは大変なことだった。万葉集の第一巻の巻頭の長歌が思い出される。天皇が野原で菜を摘んでいる乙女に「名乗れ」と呼びかけ、まず自分が「名乗」っている。「名乗る」「名告る」。沈黙は拒否を表わした。

これはいまでも変わらない。

「名にし負はば、いざこと問はんほととぎす」などもそのうである。

「名を成す」「名を挙げる」「名を惜しむ」などもこの系譜に属する。

と、まあ、妙なことを書きはじめたが、ここはこのぐらいでやめておいて、日常幼稚園で行われている点呼、出席を取ること、子どもや先生の名を呼ぶこと、その他の日常的な場面にひきつけて考えてみたいのだ。

「その赤いセーターの人」と呼ばれるのと本名を呼ばれるのでは大違いであろう。「はい、その三番目の人」と呼ばれるのと、本名を呼ばれるのでは大違いである。「○○さん」「○○君」「○○ちゃん」「○○殿」「○○様」「○○公」。名前がないという場合でも「その名無の権兵衛さん」とちゃんとしかるべく名で呼ばれる。これはほかの言語圏でも同じである。「あーと、『お名前は何といたしますか』さん……」と呼びかけられることが多い。

ことばの交換が人間関係の承認なのである。

さて、同じく日常場面。「何人いますか」「はい、十人です」。これが少しあらたまると、「何名いますか」「はい、十名です」となる。こうなると、「人」名」となる。この数学？の意味はあまり問われず、それこそふつうは「教詞」という文法上の約束事だと思われる。だが、はたしてそれでいいのだろうか。

音声学上は「何人いますか」「何名いますか」では大違いである。「ナンニン」という「ン」のリズムが「ナンニン、イマスカ」にリズムを与え、しかるゆえに「ハイ、ジュニン、デス」にもリズムを与える。時には「ハイ、ジュニン、デス」となることもある。リズムがそれを呼ぶのである。ところが「名」の方はそうはいかない。「ナンメイイマスカ」でわかるように「イ」が重なって、リズムをこわす。したがって、ていねいに聴いてみると、「ナンメイイマスカ」となって「エイ」に変じてしまっている。

事は数学や文法学のレベルから音声学上の問題、音楽

上の問題、ドラマ上の問題に広がり、同時に日常の実践場面に戻ってくるのである。

名も知らぬ遠き島より

島崎藤村の詩に「椰子の実」と題するものがあって、その初めの一行が「名も知らぬ遠き島より」となっている。

「名も知らぬ」ではないかと言った人もいる。けれども、そういう意味上の理屈はこの際おいておくことにしよう。それよりも、この「名も知らぬ」がいかにも利いているということを考えてみようではないか。

これが特定の島であってはつまらない。特定できぬところから想像力は広がり始めるのだから。ノスタルジア、ロマン、ファンタジア、いろいろ言われるが、「名も知らぬ」は利いている。いや、それだけではない。椰子の実に「汝はそも波に幾月」と問いかけていることと対^{たい}にして考えねばならぬ。「いずれの日にか国に帰らむ」と思をはせているこの詩の主人公は自分も「遊子」と

いう身をもっている。彼は椰子の實の運命に託して自分を語っている。

愛知県の渥美半島の先端にはこの詩にまつわるいわれを記した碑が建てられている。民俗学者の柳田国男が椰子の實の流れついたのを見、このようにして日本人の先祖たちは南方からやってきたのではないかと考えた。藤村はそれを耳にし、この詩をつくったのだという。

それにしても「名も知らぬ」は面白いではないか。もし、本当に「名も知らぬ遠き島」なら、「名も知らぬ」なんて言う必要はない。実用論者ならそう考える。しかし、人間の言語とはふしぎなもので、いま、ここには、ないものを表現できるという特性をもっている。のみならず、ないものをないままにしてはおけないのである。だから、わざわざ「ない」と表現する。典型が子どもではないか。その「ないないづくし」は、素朴實在論をはるかに超えてしまう。

生の余剰

「ななしのごんべえ」のような表現は、意味の余剰のあらわれなのである。人の名を眺めていると、その名に仮託されたさまざまな思いが湧きあがってくる。その多くは「かくあれかし」という期待に溢れている。美しくあってほしいという祈りが「美子」「美江」「美代」を生み、健康であってほしいという期待が「健一」「健」などを生む。日本人の名前のなかで多い漢字といわれる「和」「洋」「陽」なども、感性の古層を示すように思われる。

名のルーツは、生の余剰にある。したがって、「名は体を表わす」ことはない。名と生とは追っかけっこをしているようなもので、たえず可能性の世界をつくり出している。

園名の記号学

さて、幼稚園の名称を見てみよう。そこにはいろいろな系譜の名前がある。名門になった園、いいですね。

「園」なのですから。

実はこれも深い深い精神分析が必要。なぜ「園」なのか。それについての名著もたくさん出されている。「園」のそもそもの発端は（基本になっていく分類の基準は）、まわりを野生が取りまいていて、内部は人工の場というものでした。「園」ならばこそ、平和で平穏というイメージだった。時がたち、「園」はイミを拡大し、それと同時に抽象化していった。「学園」「学びの園」などが典型である。動物、植物園などの「園」が一方にある。他方には料理店、レストランが「園」を名称に使っている。

公立の幼稚園は設置形態を名にしている。私立の保育園は、地名ないし抽象名詞。それもメルヒェン風の名が多い。いずれにしても、野生は遠ざけられ、「なかよし」「希望」「平和」「みどり」「青空」等々が記号として人気を呼んでいる。

このにぎにぎしい名前の群のどまん中に立っていると、生の余剰が身にしみてくる。

アダ名がある。忌み名がある。タブーもある。選好の

規準も時と場によって変わってくるが、いったんできあがって、伝統ができあがると、名門の名称は容易に変えられなくなってくる。名折れになるからである。

名門が名所になり、名譽ある名聞が広がりはじめると、名取りや名寄せよろしく名声があがる。名画になったり、名歌にうたわれたりもする。名望があがり、名木や名宝で名を成すにいたる。

身を立て名を挙げ

「仰げば尊し」の歌とともに全国に広まった「身を立て名を挙げ」は、今日では色あせているように見える。けれども事はそれほど単純ではないようである。

たとえば大学の名前も、原理的には幼稚園のそれとさして違はないのだから。国公私立の大学も北から南まで千校を越えたが、それを全部数えあげるのは大変なことである。

わざわざ「国立」という字を入れている大学もある。

これを「コクリツ」と読ませているのが「横浜国立大

学」。私立の「神奈川大学」や「関東学院大学」と区別するためであろう。「横浜市立大学」もあるのだから区別するには「国立」を附さなければならなかった。ところが私立の「国立音楽大学」もあるから事は面倒である。この場合はもともと地名から来ている。

「一橋大学」は「国立」だが、「一橋」にはなく、「国立」にある。その名の由来は、神田一ツ橋が発祥の地だったから、その発祥の地から来ている。

「東京」には存在しないのに、名称上「東京〇〇大学」を名乗っている大学も右に準じているのである。

筆者は先年「センター」という名称もっている施設や団体が急増しているのを記号学の立場から分析してみた。(『知の喚起力』第一章)

「センター」はものすごく多くなっている。日本中どこへいっても「センター」がある。それは情報化社会を反映した現象であると思う。「センター」が一つだけと考えられた時代と異なり、「センター」は相対的なものであり、いくつあってもおかしくない時代に入ったのであ

る。この勢いは当分続く。「児童センター」「子どもセンター」という名称もある。

あまりに多いものだから「センター」ということばが何を指しているのか、しだいに不分明になっていく。輪郭が融けていき、他と重なってきってしまったからである。「中央センター」とか、「駅前センター」まで出現し、「ターミナル・センター」が出現するに及んでは「センター」は自己矛盾、自家中毒を来たしかねない。

しかし、ここでも素朴実在論はとつくに乗り超えられてしまっている。「センター」を「中央」とだけ固く信じこんでいると、「センター」が思わぬはずれにあるのを発見して驚くというようなことにもなりかねない。

子どもの名

子どもの名前をつくつくと眺めてみよう。

そこには人間の実存が重々しく、しかも可能性をもった形できらめいている。一つの園の中だけでもまことに美しくきらめいている。それを並べ直し、ひとつの図柄

にまとめてみよう。あの子、この子。現にいろいろなことをやっている。やがてこの子はどうなるのだろう。大げさに言えば、来し方と行く末ということになるのだが、実のところ、この名をそういう期待をこめて呼んでみることは毎日やろうとしても、むずかしい。しかし、始源に戻るのはたまに戻るだけでよい。せめて、誕生日ぐらい、そのいわれをしみじみ味わってみたい。やがて、おとなになったあるとき、だれも自分の名に少しレてみたり、あぎれてみたり、少し気にいってみたりするという予想も含めて。

しかし、名は、やっぱり名案だったのである。有名、名譽、名分、汚名とくると、どきりとするが、署名などはまことに生活の匂いのする行為なのだから。

(名古屋大学)

*

*